

前漢の太子太傅

齊* 藤 幸 子

はじめに

二千百余年続いた中国の皇帝政治において、その中心を為すのはやはり皇帝であり、時代により差異はあるとしても、皇帝の最終判断が国の行末を決め民の生活を左右した。では、皇帝を皇帝たべく教育したのはどのような人々だったのか。本論は、皇帝の太子時代にその教導を掌る太子太傅に視座を置き、就任人物、具体的役割と影響力、太傅離官後の動向等を考察する。関連する先行研究としては、齋木哲郎氏¹⁾、王健氏²⁾、馬良懷氏³⁾が、太子太傅に触れておられるが、いずれも太子太傅に主眼を置くものではない。本論の対象とする時代は前漢とした。前漢は本格的な皇帝政治が始まり、二百余年と長期間にわたり比較的安定した王朝であり、皇太子が皇帝に即位するという順当な継承が多くみられる。従って、太子太傅の実像もより明確になるのではないかと思う。

第一節 太子太傅の語源と職掌

「太子太傅」は「太傅」から派生した官職であると認識し、かつ官職の名称はその職掌を表すことから、初めに「太傅」の語源をみていく。⁴⁾

まず、「太傅」の「太」は泰・大に通じ「豊かで落ち着いたさま」を意味するが、年長者・目上の者に対する尊称の言葉としても用いられる。

次に「太傅」の「傅」であるが、この字は、『史記』や『漢書』には、太傅の他、少傅・中傅・師傅・外傅・傅父・傅姆・傅婢等の形で熟語として用いられ、あるいは「傅」という動詞としても使われる。顔師古の注では、「傅、履也。」⁵⁾「傅、輔也。」又は「傅、相也。」とある。「履」という字は、「履・一曰蓋也。」の他に「履・孚也。如孚甲之在物外也。」とあり、「孚」は「育む」の意で、「孚甲」は種子を包む外皮のことである。「輔」という字は、「助」の意味を持つ。「相」という字は「扶也。」とある。従って、「太傅」という言葉には、「年長者で、たすける人、かばう人、ただす人、育む人」というよ

うな語意があると思われる。

『漢書』百官公卿表によると、「太傅」は、「周制」では三公（太師・太傅・太保）の一人であり、三公とその副である三少（少師・少傅・少保）の計六人が、天子の輔弼の任にあたりとされている。前漢では、初期（呂太后摂政時）と末期（王莽専権時）、いずれも幼帝が擁立された時に天子の師傅として置かれている。

『礼記』文王世子篇には、周初を範とする理想的な太子教育論が述べられている。それによると、太子太師・太子太傅・太子太保とそれぞれの副である太子少師・太子少傅・太子少保の計六人が太子の教導を掌るとされる。うち太子太傅の役割は、「父子君臣の道」を明らかにして太子を善導することであり、少傅の役割は太傅自らが示す德行を觀て、これを太子に審らかに諭することであるとする。

『通典』職官十二には、「漢魏故事、太子は二傅に弟子の礼を執り、皆書を為すに令と言わず。少傅は臣と称すれども太傅は不臣。」とあり、『漢書』百官公卿表には、「太子太傅、少傅、古官。属官に太子門大夫、庶子、洗馬、舍人有り。」とあり、秩石は、太傅・少傅とも二千石である。本論では少傅も同じく考察の対象とした。具体的にみていく。

第二節 太子太傅就任者

(一) 就任期間と太子の年齢

【表1】は前漢の太子太傅及び少傅就任者をほぼ時代順に並べ、太子名、就任時の太子の年齢、就任期間、就任前後の経歴を示した。太子太傅十九名、太子少傅十二名計三十一名にのぼる。

まず、太子太傅あるいは少傅が置かれる期間であるが、【表1】に見られるように、

（キーワード）太子太傅／皇太子／前漢／太子教育／宣帝

*平成一九年度生 比較社会文化学専攻

就任者は交替するが、太子がその位にある間は、太子太傅及び少傅の官が設けられていることがわかる。

武帝の最初の太子である拋の場合を見ると、立太子とともに石慶が太子太傅となり、以後、趙周・周建徳・卜式と続く。拋が三十八歳の時、巫蠱の乱が起こり拋も巻き添えを蒙って、謀反者として追捕され殺されるのであるが、この時の太子少傅は石徳^⑤であり、彼は太子軍の兵を率いて丞相軍と戦い最後には捕われている。この時の太子太傅は不明である。武帝は皇帝在位期間が五十五年と長期であり、従って拋の太子在位期間も長くなるのであるが、拋には七歳の立太子から三十八歳で没するまでの約三十年間、太子太傅・少傅がついていたことになる。就任期間を見ると、石慶が太子七歳から十四歳までの七年間で、拋の立太子から元服までと考える。他の太子太傅については判明しない。

宣帝時の太子奭（後の元帝）の場合は、地節三年（前六七）、八歳で皇太子に立てられ、最初に丙吉が太子太傅となり、黄龍元年（前四九）、二十七歳で皇帝に即位するまでの約二十年間、疏広・夏侯勝・黄覇・蕭望之と太子太傅が入れ替わっている。奭の太子少傅で判明している者は、疏受と周堪だけであるが、周堪が奭の皇帝即位直前まで太子少傅として務めていたことからしても、太子少傅も太子太傅と同様に置かれていたと考える。就任期間は、疏広が太子八歳から十二歳までの約五年間であり、蕭望之は十九歳から二十七歳までの八年間と三十一名中最長である。一方、丙吉・黄覇は数ヶ月と非常に短い。

他は、叔孫通が太子盈（恵帝）の十二歳から十六歳までの四年間、衛綰が太子徹（武帝）の七歳から十歳までの三年余、韋玄成が太子驚（成帝）の三歳から八歳までの五年間を太子太傅として務め、匡衡は太子驚が九歳から十四歳までの五年間を太子少傅として務めている。

誕生以来、太子は後宮の内て乳母・阿保等の宮女そして宦官の中で育てられ、正式に皇太子として立てられた時、太子太傅及び少傅に接し、初めて彼等の男性らしい気概に触れる。立太子年齢はだいたい七歳前後であるが、その後の太子の多感な時代を太子太傅と少傅が数年にわたり深くかわつていくのであり、その影響力は非常に大きいと言える。

次に太子太傅・少傅の就任年齢であるが、没年が判明していても生年不明な者が多く正確な年齢は明示できない。しかし、各人の経歴を見ると、大半が人生半ば以降に就任しているので、五、六十歳以上の熟年期に達していると考えてよい。中には夏侯

勝のように九十歳で太子太傅として卒官した者もいる。

（二）太子教育

太子太傅の職掌は太子を善導することであり、太子教育が重要な役割と考えるが、具体的にどのように太子教育に関わったのであろうか。

前漢最初の太子太傅は叔孫通であり、高祖九年（前一九八）、十二歳の太子盈（恵帝）の師傅として就任する。周知のように、叔孫通は、魯の学者で、秦の博士を務め、漢朝の諸々の儀礼法式を制定した。礼の何たるかを諸侯群臣に示し彼らを教化した実績がある（『漢書』卷四三叔孫通伝。以下『漢書』については書名を省略する）。劉邦が挙兵したのは盈が一歳の時であり、以来盈は戦乱の中で育ち、教育らしい教育は受けてこなかったはずである。八歳で皇太子に立てられたものの、太子太傅がつけられたのは立太子の四年後であり、盈は既に十二歳であった。高祖は自分に学問がないことを悔い、太子盈には次期皇帝として恥じない学識と教養を身に付けさせたいと願ったのであろう。奉常であつた叔孫通を敢えて官位の低い太子太傅に遷し太子教育を委任した。彼の博士としての広い学識と、群臣に礼教を施した手腕及び現実的に則して事を処する柔軟性を高く評価し、太子教育の適任者と判断したからであらう。恵帝は諸々の礼及び親親の道をよく修め、皇帝となつてからも叔孫通を畏敬しその諫言をよく納めている（卷二恵帝紀贊）。

文帝時に入ると、太子太傅の人選に共通する特徴が現れ始める。まず、太子啓（景帝）の太子太傅となつた張相如は、その行いが惻隱の実を備えた長者として周囲に認められ、文帝もそれを称えている（卷五十張釈之伝）。張相如の後任である石奮はその恭敬・廉潔さを高祖に愛され功労を積んで昇進してきた人であり、「文学は無けれども、恭謹なること、挙げて与に比ぶる無し。」とされ、皆の推薦を受け太子啓の太傅となつた（卷四六万石君伝）。衛綰は、戯車の技を以て郎官となり、「功次もて中郎將に遷り、醇謹なること它に無し。」と評され、文帝が景帝に「綰は長者なり。善く之を遇せよ。」と遺詔した人物であり、景帝も「敦厚にして少主を相くべし」として太子徹（武帝）の太子太傅に任命している（卷四六衛綰伝）。

武帝期には、石慶が太子拋の最初の太子太傅に就任する。石慶は石奮の末子であり、石家の家風を反映して謹直・恭順であるとされている。武帝は最初の子である太子拋を寵愛し、拋七歳の時に皇太子に立てる。群臣の中から太子太傅を選ぶのであるが、武帝はその選考対象を中央官だけではなく郡太守にも広げる。その結果、「治めずし

て大いに治まる。」として広く吏民に慕われる沛の太守石慶が選ばれ、以後七年間を太子太傅として務める（巻六武帝紀及び巻四六万石君伝）。同じく抛の師傅であつた嚴青翟と趙周は二人とも「清廉謹直」とある（巻四二申屠嘉伝）。卜式も抛の太傅であるが、その質朴忠実な人柄を武帝に見込まれ齊王の太傅となつた経歴があり、武帝は彼を長者と称えている（巻五八卜式伝）。

このように見てくると、儒家として明記されている叔孫通・寶嬰・王臧を除けば、武帝時までの太子太傅・少傅は、直接太子に何かを教授したとは考え難く、又そういう記述もない。儒家としての教養が特筆されていないこと、吏民の尊敬を集め有徳であり「長者」と評されるような行動において共通性がみられ、断定はできないが黄老的人物が多い。父帝は、恭敬・清廉・謹直・敦厚・質朴・忠信等と表現される彼らの人柄に重点を置いて太子の師傅に任命しており、学識を問題としていないことは、石奮が「無文学」と記され、あるいは卜式が「不習文章」として御史大夫から太子太傅に遷されていることから明らかである。嚴青翟・趙周・石慶・衛綰は後に丞相となるが、その評価は「手堅く謹直ではあるけれども、丞相としてはただその員に備わっていただけである。」と評されている（巻四二申屠嘉伝）。高い学識や際立つた功績はなくとも、吏民から慕われる彼らの「人徳」によつて太子を善導させることが、この時期の父帝が太子太傅・少傅に求めた役割であつたと言えよう。

昭帝期は皇太子がいないので太子太傅は存在しないが、次の宣帝期に入ると、太子太傅に就任する人物は前半とは多分に様相が異なってくる。

まず宣帝期、太子爽（元帝）につけられた太子太傅であるが、最初の丙吉は、律令を修め、廷吏など実務経験が豊富であり、かつ『詩』『礼』に通曉している。「人となり深厚にして、善を伐らず」と温厚な人物であることも評価されていた（巻七四丙吉伝）。丙吉はすぐ御史大夫に遷り、後任として少傅であつた疏広が太傅に昇格する。疏広は、「疏氏春秋」を立てた『春秋』学の大家である。五年間太傅として務め、十二歳の太子奭は『論語』『孝経』に通曉する（巻七一疏広伝）。

就任時期は不明であるが、夏侯勝もその最晩年に奭の太子太傅となり九十歳で卒官している。彼は夏侯始昌に『尚書』及び『洪範五行伝』を受け、天災地異に明らかであるとしていた。彼の説く『尚書』は「大夏侯」の学として世に知られる。武帝時以前の太子太傅のように恭順という人柄ではなく、質朴ではあるが、武帝を宣帝の前で堂々と批判し詔を非議して三年間投獄されている。恩赦を受け諫大夫給事中として近侍し、相変わらず臆せず意見を述べ、挙動も簡易であり重々しい威厳のようなもの

はなかったとその列伝は記している。宣帝はこの儒者らしからぬ儒者を親愛した。夏侯勝の弟子の蕭望之は、太子奭が二十七歳で皇帝に即位するまでの八年間太子太傅を務め、夏侯勝から受けた『論語』と『礼』の「喪服」を太子に教授している（巻七八蕭望之伝）。蕭望之の就任期間のうち後半三年余は周堪が太子少傅であつたが、周堪も夏侯勝の弟子である。

元帝期、太子驚（成帝）の太子太傅・少傅も大儒である。韋玄成は、父韋賢の学業を修めた『詩』の大家であり、嚴彭祖は『春秋』学を修め「嚴氏の学」を立てた。太子少傅匡衡も、嚴彭祖と同じく東海出身で『詩』において知名であり、林尊は『尚書』を専門とする。成帝期には、定陶王欣が皇太子に立てられ、その太傅師丹は匡衡の弟子であり、彼の『斉詩』は師丹の学と言われる（巻八八儒林伝）。

以上のように、宣帝以降の太子太傅はその多くが儒学者であり、それぞれ専門分野において独自の学派を樹立している。師が太子太傅となり、その弟子が次の太子太傅や少傅に就くというように、その人的連鎖は諸侯王国の太傅にまで拡がっていく。前漢前半の太子太傅は、その多くが学識よりもその長者的な人柄でその任に在り、彼らが直接学問を太子に教授したという形跡はないが、宣帝期以降の師傅は、直接太子に『論語』・『礼』・『孝経』等を講授していることが確認できる。

周知の如く、宣帝は儒学と法を併用して治世に臨み、儒家と共に法術の士をも同じく重用した。現に儒学を好んだ太子が、法家を廃し儒者を登用することを進言すると、宣帝は「漢家に自ずから制度有り、霸王の道を以て之を難えんことを本とす。」として「我家を乱す者は太子なり！」と太子を叱責している（巻九元帝紀）。宣帝自身は、幼少時は外戚史氏の家で育てられ、その後掖庭で養育され『詩』・『論語』・『孝経』を修めているが、自身は『穀梁春秋』とともに『申子』君臣篇を好んでいる（巻八宣帝紀）。宣帝が寵愛した淮陽王欽も経書・法律を学び両方に興味を示している（巻八十宣元六王伝）。従つて、儒学と並んで法学も太子が会得すべき必須学問であつたはずである。では何故太子太傅には大儒を任命したのであろうか。その理由を考えてみたい。

民間で成長し社会の矛盾や悲劇を見てきた宣帝にとつて、治世とはまず民の生活を安定させることであつた。親政が始まると、塩の価格が下げられ、困窮乏する者には施与が行われ、宮中では節約が奨励され、樂府の樂人は帰農を命じられ、丞相以下京師の諸官府の令・丞に至るまで穀物を長安の倉に納入し貧民に分け与えさせるなど、恤民政策が積極的に推し進められた。さらに、地方官には循吏を多用して農業を奨励し、各地で着実に良い成果を収めていた（巻八九循吏伝）。宣帝は、法は施政に

欠くべからざるものであるが、あくまでも統治のための道具にすぎないことを十分認識していた。民を導き治めるためには仁を旨とし、皇帝たる者は徳治を追求する姿勢を保持すべきであること、その為には帝王学の主体は儒学であり、他の学問ではないとの判断を下し、その為の大儒登用であると考える。現に、甘露三年（前五二）には、帝の命により石渠閣会議が開かれ、著名な儒学者によって五經の校訂がなされる等、宣帝自らが儒学研究の先頭に立ちその振興を図ろうとしている。

一方、社会の趨勢がもはや儒家思想を無視できない状況にあつたという事情もある。昭帝期に行われた塩鉄会議では、賢良・文学といわれる儒生が農本主義を主張し専売制を否定するが、彼らの主張は各地の豪族の利害と合致しており、その族的結合或いは家族倫理観は地方豪族の支持を得、儒学は着実に地方社会に浸透し始めていた。武帝期には、法家の説に重きが置かれ、儒学はその事実を粉飾するために統治の建前論として利用されており、内実は酷吏によって地方の豪族に弾圧を加えた。しかし、宣帝の時代には地方豪族はより強力な存在となり、一族の中から郡県の官吏を輩出し、さらに中央官界にも進出していった。もはや豪族と対立するのではなく、彼らと妥協しつつ政治を行わなくては民を統治できない状態になっていたのである。¹⁰このような状況の下で、宣帝が儒学の大家を太子の師傳に任命し、次代の皇帝の育成を彼らに委ねたのは、これからは儒学を漢朝の統治理念に据えるという宣帝の明確な意志表示の一つであると考ええる。

では、大儒による太子教育はどのような成果を得たのであろうか。一流の儒学者による教育を受けた元帝及び成帝の場合はどうであろうか。

元帝は、その太子時代、父宣帝が「漢朝を乱す者は太子であらう。」と危惧したほど儒学に傾倒した。元帝紀の賛には、「少くして儒を好み、即位するに及び、儒生を徴用し、（中略）、而して上、文義を牽制し、優游にて断ぜず。孝宣の業、衰う。然しながら寛弘にして下に尽くし、恭儉より出で、号令は温雅、古の風烈有り。」とあり、元帝は経書の文章に拘泥して優柔不断だったので、宣帝時の治績は衰えたとのマイナス評価を得ながらも、寛大にして恭儉温雅であり、古の風格と功績が有ったとするプラス評価は高い。従って、大儒による教育は儒者から見た場合、ある程度の成果を得たと言えるよう。元帝の即位後に顕著になったことがある。詔が異常なまでに天変地異に言及していることである。実際、毎年のように地震・日食・火災等が起きているのであるが、それら天変地異を陰陽の乱れとして受け止め、それら全てが「朕の不徳」のせいであるとして天の裁きを恐懼する文面が目立つてくる。このような災異説は、

既に武帝の頃より注目されていた。董仲舒・夏侯始昌などが著名であり、夏侯始昌は柏梁台の火災の起こる日を予言して武帝の信頼を得、武帝が寵愛していた昌邑王酈の太傅に就任している。その族子である夏侯勝もまた、昭帝崩御後、霍光が一度皇帝に擁立した昌邑王賀を廃位させようと画策していることを予言して霍光を驚かせ、それ以降経術の士が重用されるようになったとされる（巻七五兩夏侯伝）。宣帝も、大地震の際、天変地異を天地の戒めとしているが、元帝の詔は頻繁に天変地異に言及し始める。何故か。その理由の一つとして太傅による太子教育が考えられる。予言を的中させて霍光を驚かせた夏侯勝は、元帝の太子太傅であつた。その弟子蕭望之も災異をよく説き、彼は八年太子太傅を務めた。周堪（太子少傅）や孔霸（太中大夫時、太子に経書を講授）も夏侯勝の弟子である。太子教育に於いても災異理論が講授されたと考えてよい。その一つの表れが元帝の詔であらう。

では、元帝は常に師傳の教えを素直に受け入れる優等生であつたのかと言えば、否である。別の一面がある。父である宣帝は、遺詔として太子太傅蕭望之、少傅周堪、外戚史高に太子の皇帝即位後の輔政を委任した。元帝は、即位当初こそもと師傳の進言を採納して、儒者を登用し儒学に基づく政治を目指して施政に臨むが、病を得てからは政事を放棄し、好きな音楽に凝り始める。元帝に近侍していた中書宦官の石頭は法令・政事に習熟しており、宣帝時代から実務を久しく典つていた。石頭は「よく人主の微指を探る」ことができたので、元帝は彼を信任し遂に政事を任せてしまう。蕭望之は、中書に宦官を置く非を言上し石頭の罷免を建白するが、元帝は聴き入れず石頭を重用し続けた。結局、蕭望之は石頭の謀略にはまって自殺する（巻九三佞幸伝）。八年間師傳であつた蕭望之の諫言より、禁中に近侍し、自分の意を汲みながらきめ細かく働く石頭の有用性の方が元帝の意に適つたのである。たとえもと師傳であり父帝により全面的な輔佐を委任されていても、彼らが皇帝の私生活にまで立ち入ることはできなかったということである。成帝の場合も、朝廷においては礼容正しく、かつ直言を受け入れ、公卿はよくその任にあたる事が出来たと成帝紀の賛はプラス評価を与えている一方、私生活においては酒色に耽り外戚の専横を許してしまったと結んでいる。

では太子の私生活を太子太傅・少傅が制約できたか否かであるが、これにも限界があつたと思う。師傳の目の及ぶ範囲或いは太子に近侍する東宮諸官を通してある程度太子の言動を制約できたであらうが、太子の成長と共にその私生活面への介入は難しくなっていくのが必須である。太子太傅の職務は父子君臣の道を明らかにして太子を

善導することではあるが、それは礼容など太子の外面的な言動においてはある程度成果を収めても、太子の成長とともに、道德観念、趣味嗜好など太子の内面的部分を制約するには、おのずから限界があつたと言わねばなるまい。

王健氏は、漢代皇帝の儒学における学識の高さを認めながらも、その学識とは裏腹に、実際の皇帝の道德観念と私生活状況には、恣縦的側面が多く、君主の尊儒習経が虚偽的であつたことを暴露しているとする。すなわち、漢代君主の実像と儒家道德の理想との乖離は、儒学による帝王教育の最大の失敗であつたとする¹⁹⁾。しかし、漢代君主の実像が理想から乖離した原因は、儒学教育のみに帰せられるものではないと思う。ここでそれを詳しく論じる余裕はないが、皇帝の生来の資質、世襲制の弊害、禁中という特殊環境、皇帝であることの重圧、恣意を許される立場など様々な要因が考えられ、太子の人格形成に儒学以外の他の学問をあてたとしても、同じような結果が生じる可能性は大きい。

(二) 後継者問題等

太子太傅・少傅による教導成果を明確に測ることは難しいが、太子太傅・少傅がその職務上の立場から全力を尽くして取り組み、それなりの結果を残すことがある。それは後継者問題である。皇太子は正式に定められた皇帝の後継者であり、太子太傅・少傅は儲君養育の為に師傅となるのであるが、皇帝は時として太子廃嫡を意図する。理由は、寵愛する女性の子に愛情が移る場合が多い。皇太子の廃嫡は、太子太傅にとつては傳としての責務を問われることである。

一方、太子太傅・少傅は、養育した太子に対して特別な親愛の情を抱くようになる。師傅として関わった期間が長ければ長いほど、育ての親の子に対する愛情にも通じるような感情が強くなるはずである。また、太子にとつては、師傅が堅苦しく煙たい存在に思える時があつても、月日の流れとともに畏敬の念や恩愛の情が湧くようになり、師傅と太子の間には特別な情愛が育まれる。史書には、皇帝がもと太傅・少傅の師恩に言及している文面が数々見られる。他の官僚と比較した場合、二傅と太子との結びつきは非常に強いと言つてよい。

従つて当然、太子太傅・少傅は廃嫡を阻止すべく父帝の説得に全力を尽くす。前漢最初の太子太傅であつた叔孫通にも、この問題が生じた。高祖劉邦が、盈を廃し、代わりに寵姫戚夫人の生んだ如意を皇太子に立てようとした際、叔孫通は、「陛下必ず嫡を廃し少を立てんと欲せば、臣願わくは先ず誅に伏し、頸血を以て地を汗さん。」

と死を賭して諫めた。廃嫡を諫める叔孫通の気迫に高祖は諫言を受け容れる姿勢を見せる(巻四三叔孫通伝)。最終的には、行少傅事として一時少傅の任にあつた張良の画策が功を奏し(巻四十張良伝)、廃嫡問題は止み盈は即位し恵帝となる。

寶嬰は景帝の母である竇太後の族子であり、呉楚の乱では大將軍として参戦した。後、栗姬所生の長子榮が皇太子に立てられ、その太子太傅となる。しかし立太子三年後に、栗姬と景帝の姉の確執が原因で、榮は廃嫡され臨江王となり、最終的には自殺に追いやられる。寶嬰はその間々々景帝を諫争するが聴き入れられなかった。寶嬰は景帝の処置を不満とし、事件の後しばらく南山に退いている(巻五二寶嬰伝)。

元帝期の匡衡は、太子驚の九歳から十四歳までの約五年間を太子少傅として務める。元帝は、傳昭儀とその子定陶王康を寵愛し驚の廃嫡を考える。それを知った匡衡は早速上疏してその非を訴える。太子擁立派には、匡衡の他、宣帝の外戚史高の子で侍中である史丹、外戚王商がいた。結局史丹が元帝の病床まで赴き、元帝から皇太子を廃嫡しないという確約を取り付け問題は解決している(巻八二史丹伝)。

いずれの場合も、師傅として身を挺して太子の廃嫡を阻もうとする様子が窺われ、廃嫡阻止の決定打とは言えないまでも、父帝に廃嫡を思い留まらせる上で重要な一役を担ったことは確かであろう。

次に太子太傅が外戚の進出を抑える方向で動いた事例を挙げる。宣帝が親政を開始し、許皇后所生の奭が正式に太子に立てられた時、太子の外祖父許伯が太子の幼いことを以て自分の弟である中郎將許舜による太子家の監督保護を申し出る。宣帝が太子太傅疏広にそのことを諮問すると、疏広は、「太子は国の儲副の君なり、師友は必ず天下英傑においてし、宜しく独り外家許氏にのみ親しむべからず。且つ太子には自ら太傅・少傅有り、官属已に備われば、今また舜をして太子家を護るは、陋を視し、太子の徳を天下に広める所以にあらず。」としてその申し出を断るように答申し、宣帝はその意見を善しとする(巻七一疏広伝)。疏広の言には、儲君の養育を掌るという師傅としての自負があり、太子を公的人間としてより方正な道に導こうとする使命感がある。太子の教育を第一義とした判断であり、外戚の牽制を目的とするものではないと思われるが、結果的には外戚の進出にブレーキをかけたと言える。

第三節 太子太傅就任前後の経歴

(一) 就任前の官職

ここでは「表1」により、どのような官職にある者が太子太傅・少傅に任命されたのかを考察する。官職がすべて列伝に記載されているとは限らないので、ひとまず、太子太傅就任の直前に記載された官職を掲げてある。これによると、太子太傅・少傅とも前職が御史大夫・九卿・郡太守など官秩が二千石以上の者が圧倒的に多い。比二千石の光禄大夫からの遷任が二人（丙吉と匡衡）いてそれを併せると、判明できる二十二例中十九例が比二千石以上である。このことから、太子太傅・少傅就任者の条件として比二千石以上があったと考えられる。

一方、前漢では、太子太傅・少傅いずれの官秩も二千石であるのに、中二千石の御史大夫から「左遷」された者が二人いる。卜式は塩鉄専売に反対して武帝の不興を買ったが、宣帝の意向により廷尉に下されずに太子太傅に遷されている。しかし、いずれの場合も「左遷」とはあるが、ほんとうにその人物を疎んじた結果ではないだろう。真に疎んじたならば、決して太子の養育を掌る太子太傅には置かないはずである。現に、卜式は太子太傅として天寿を全うし、蕭望之は左遷後も、重要問題を議する時には必ず参与し宣帝より意見を求められている。宣帝は「望之、経明にして持重し、論議に余有り。材、宰相に任えん。」として蕭望之を重用していた。太子太傅に遷したのは、彼を再度登用しようとする宣帝の意図によると思う。宣帝は遺詔して、蕭望之を前將軍光禄勳領尚書事に任命し新帝の輔佐を委任している。

郡太守、左馮翊、京兆尹及び長信少府からの遷任は同じ二千石内の異動であるが、少府及び光禄勳から太子太傅に官を遷った者（少府―夏侯千秋・韋玄成・林尊、光禄勳―趙玄・師丹）^⑬は、官秩の面からすると中二千石から二千石への異動であり、百八十斛から百二十斛への減俸である。しかし、儲君の養育を担い、太子の皇帝即位後にはもと師傅として尊崇される太子太傅・少傅という官職は、秩石の多少を超えた榮譽あるものとされ、官秩は下るが、特に左遷的な意味合いはないとしてよい。

その他の特色として言えることは、表には直接明示されていないが、地方行政官経験者が多いことである。武帝以前では、張相如及び衛綰が河間太守を務めている。武帝期、最初の太子太傅である石慶も沛の太守であり、それ以前は、斉国の相として広

く吏民に慕われていた。武帝は法術第一主義の酷吏を多用したが、皇太子の師傅には、並み居る群臣の中から、人徳により吏民の信頼を得ていた石慶を選んだのである。卜式も緱氏県令及び成皋県令として徳治による功績を挙げている。

この傾向は、宣帝時以降さらに顕著になり、三輔を含む地方行政官経験者は五人（黄覇・蕭望之・韋玄成・嚴彭祖・張譚）確認できる。黄覇は夏侯勝と共に三年間下獄されたが、出獄後、夏侯勝の推薦により揚州刺史を経、その後潁川太守として治績天下第一と称えられた。宣帝は黄覇の治行は長者のそれであると称揚し頻繁に恩賞を授けている。蕭望之は宣帝より「通政事者」と認められ平原郡の太守及び左馮翊を経験している。嚴彭祖は左馮翊就任前は河南太守として治績の優秀を称えられ、韋玄成も河南太守を務めており、張譚は京兆尹の経験者である。

昭帝期には、武帝時代の奢侈と膨大な軍事費出により海内は消耗困窮し民の社会不安は増幅し、その解消策として積極的な恤民政策が行われていた。霍氏の族誅後、宣帝が親政を開始すると、賢良・方正等の士を募り、彼等を地方に派遣して農業を奨励し積極的な救恤政策を推進する。すなわち循吏による徳治政策である。法を守りながらも、礼教に重きを置き以て民を感化するという、王霸併用の政治姿勢である。宣帝は又、州刺史や郡太守等地方官を任命する場合には、必ず親しく引見してその統治方針を質しており、政治が公平で裁判が正しいと庶民はその田里に安住して、嘆息愁怨の心を持たないとして「我と共に此れをなす者は、其れ唯だ良二千石のみか。」^⑭と明言している。また、「用いる所皆治民を更しめ以て考功す。」として、自分が登用する者には皆民を治めることを経験させてその功績を勘案する方針を示し、太守はじめ行政官としての経験を重要視している。従って、太子教育を掌る太子太傅にも行政の経験者を採用し、国の統治とは現実的にはどういふことなのかを、彼等を通じて太子に教えようとしたのだと思う。

他の特色としては、宣帝時以降、帝室を担当する官の出身者が目立つことがある。皇太后宮を掌る長信少府から一人（夏侯勝）、太子家令から一人（疏受）、少府からは三人（夏侯千秋・韋玄成・林尊）確認できる。夏侯勝はかつて上官太后に『尚書』を教授した経歴を持ち、それ故に長信少府を二度拝命していると思われる。又、皇帝に近侍する郎中関係からの出身者も多い。疏広は博士太中大夫から太子少傅となりその後太子太傅に昇格している。光禄大夫からは丙吉と匡衡であり、光禄勳からは趙玄と師丹があり、議郎博士からは太子少傅の夏侯建がいる。皇帝は皇帝自身の目で、皇帝や皇太后に近侍する者の資質を観察し、その中から太子教育を任せ得る人物を物色し

ていた可能性がある。多くある官職のうち、太子太傅の前職が少府や郎中関係など皇帝に近侍する一定の分野に集中する傾向が見られることは留意すべき点である。

(二) 離任後の動向

太子の師傅を離任した後は各自どのような経歴を辿ったのか。【表1】によると、太子太傅として卒した者、或いは離職を願い出て帰郷した者を除けば、大体が太子太傅離任後すぐに他官に遷り、ほとんどが中二千石以上の昇格である。

前漢前半で最終的に丞相に至った者は、竇嬰・衛綰・石慶・嚴青翟・趙周の計五名である。⁽¹⁶⁾ 宣帝以降は、四名（丙吉・黄覇・韋玄成・匡衡）いる。その他張譚と趙玄は御史大夫になり、師丹が大司空に至る。太子太傅・少傅から他官に遷った者は十八名であるが、うち丞相に至った者は九名、御史大夫は二名、大司空一名、前將軍が一名となり、十八名中十三名が、太子太傅・少傅離職後か、他官をはさんでかは問わず、三公もしくは三公クラスに至っているわけである。これは注目すべき数字であると思う。その数字を別の点から確認してみる。

【表2】は前漢の丞相就任者全員について、丞相就任前の官職を示したものである。ここでは丞相全四十六名のうち公平を期するため、皇太子が立てられなかった時期（従って太子太傅・少傅がない時期）の丞相二十名（名前の前に×印を付した）を除いた上で、残り二十六名について考察する。二十六名のうち九名が太子太傅・少傅経験者であり全体の三十五%を占める。二十六名の丞相の中、直前の官が御史大夫であった者が十四名と圧倒的に多いが、この十四名について、さらに御史大夫就任前の官を見ると、「太子太傅・少傅」↓（御史大夫）↓丞相の九名が最も多い。丞相の前に就く官として御史大夫の次に多いのが、郡の太守或いは王国の相で四名（張蒼・申屠嘉・李蔡・劉屈氂）が確認できる。又、將軍や大尉など高級軍官から丞相になった者も同じく四名（周勃・漢嬰・周亜夫・公孫賀）である。『通典』職官六によると、前漢では、郡の太守あるいは諸侯王国の相を務め、高第の成績を修めた者が御史大夫となり、「職に任える者」が丞相になることが「故事」として認識されていたようである。⁽¹⁷⁾ つまり、前漢では「郡太守・諸侯王相」↓御史大夫↓丞相というコースが丞相に至る有力な昇進ルートとして広く認識されていたことである。しかし、今回の考察結果から、「太子太傅・太子少傅」↓御史大夫↓丞相⁽¹⁸⁾ がより高い割合で丞相に至るルートであったことがわかる。太子太傅・少傅は常置の官ではない。その就任者も限られる。にもかかわらず、丞相に至る昇進ルートにおいて大きな位置を占めてい

たことは注目に値する。又、彼等の丞相就任は多くが父帝在位中になされることからしても、皇帝が太子太傅・少傅就任者を信任する度合いは非常に高いと言える。

おわりに

以上の考察結果をまとめると下記ようになる。前漢の太子太傅・少傅は立太子時に任命され、太子の教導と太子官属の統率を掌り、官秩は共に二千石である。就任期間は大体四、五年であるが、七、八年と長い者もいた。就任の前提条件は比二千石以上と推定できるが、武帝期以前と宣帝期以降では就任者のタイプに大きな差異がある。武帝期以前では、恭敬・謹直・敦厚等と称される人柄が重視され、長者的人物が多く選任され、学識は全く問題とされていない。しかし、宣帝期以降は、その多くは儒学の大家であり、彼等が直接太子に経書を講授するようになり、その教育的影響は太子の皇帝即位後の政治姿勢に判然と現れている。離官後は、大半が父帝の命により丞相等三公クラスに至り、太子太傅・少傅経験者が極めて高い割合で前漢の政治に深く関わっていたことがわかる。今後は、中央から派遣された王国の太傅についても考察したい。

【注】

- (1) 齋木哲郎『秦漢儒教の研究』汲古書院、二〇〇四年。
- (2) 王健「漢代君主研習儒学伝統的形成及其歴史效応」『中国史研究』一九九六年第三期。
- (3) 馬良懷「士人皇帝宦官」岳麓書社、二〇〇三年。
- (4) 語源については、『説文解字』・『釈名』・『広雅』・『爾雅』を参照。
- (5) 卷四六万石君伝及び卷六三武五子伝、石徳は太子掬の太傅石慶の中子である。
- (6) 夏侯勝の就任時期については不明であるが、他の就任者から推して疏広の後と思う。
- (7) 前掲注三書、一四九頁。
- (8) 元帝期の太子驚（成帝）の立太子は三歳と例外的に早い。
- (9) 『古文苑』（董治安主編『兩漢全書』山東大学出版社）、所引「漢高祖劉邦―手勅太子」：「吾遭亂世、當秦禁學、自喜、謂讀書無益。泊踐祚以來、時方省書、乃使人知作者之意。追思

昔所行、多不是。(中略)吾生不學書、但諸書問字而遂知耳、以此故不大工、然亦足自解。今視汝書、猶不如吾。汝可勤學習、每上疏、宜自書、勿使人也。」

- (10) 以上、先行研究は数多いが、紙幅の関係で割愛し、西嶋定生『秦漢帝国』講談社学術文庫、一九九七年の記述に絞った。

- (11) 以上、福井重雅『漢代官吏登用制度の研究』創文社、一九八八年、一四〇～一四三頁を参照。

- (12) 前掲注二書、二四頁。

- (13) 百官公卿表序文。

- (14) 卷八九循吏伝「與我共此者、其唯良二千石乎。」

- (15) 卷七八蕭望之伝「所用皆更治民以考功。」

- (16) 寶嬰は、丞相就任は太子太傅を離官してから十年後である。

- (17) 『通典』職官六御史大夫の条・御史大夫、秦官。漢因之、位上卿、銀印青綬、掌副丞相。故事、選郡守相高第為御史大夫、任職者為丞相。

- (18) 因みに、丞相全四十六名を対象にしても、九名という数字は二割を占めて一番多く、郡太守・王国相を経た者六名が続く。

注…出典は『漢書』。アラビア数字はその巻数を示す。

師傅名	皇帝	太子、立太子齡	就任期間	前職（秩）	離任後の経歴	出典
叔孫通	高祖	盈(恵帝) 12歳	前198~194	奉常 (中二千)	奉常(中二千)	43
張良*	〃	〃				40
張相如	文帝	啓(景帝) 9歳		? 大將軍 (万)	? 卒官	功臣表、文帝紀、46
石奮	〃	〃		太中大夫 (比千)	九卿, 王国相 (二千)	46
竇嬰	景帝	栗太子榮	前153~150	大將軍 (万)	丞相(万)	52
衛綰	〃	徹(武帝) 7歳	前150~147	中尉 (中二千)	御史大夫(中二千)→丞相(万)	46
王臧*	〃	〃			郎中令(中二千)	武帝紀、儒林、52
石慶	武帝	衛太子捫 7歳	前122~115	郡守 (二千)	御史大夫(中二千)→丞相(万)	46
嚴青翟*	〃	〃	~118	御史大夫 (中二千)	丞相、下獄死	公卿表
任安*	〃	〃	前118~		? 益州刺史 (二千)、下獄死	漢55、62、『史記』60、104
趙周	〃	〃	~115		丞相 (万)	6
周建徳	〃	〃	前112		免官	功臣表、公卿表、40
卜式	〃	〃	前110~	御史大夫 (中二千)	卒官	58
石徳*	〃	〃	~前91		卒官	46、63
丙吉	宣帝	奭(元帝) 8歳	前67	光禄大夫 (比二千)	御史大夫 (中二千) → 丞相 (万)	8、74
疏広	〃	〃	前67~62	太中大夫、 太子少傅	退官、帰郷卒家	71、88
疏受*	〃	〃		太子家令 (八百)	〃	〃
夏侯勝	〃	〃		長信少府 (二千)	卒官	75、88
夏侯建*	〃	〃		議郎博士 (比六百)		75
夏侯千秋*	〃	〃		少府 (中二千)		75
黄覇	〃		前58	郡守 (二千)	御史大夫 (中二千) → 丞相 (万)	75、89
蕭望之	〃	〃	前56~48	御史大夫 (中二千)	前將軍光禄勳 (中二千) ?	6、78、88
周堪*	〃	〃	前51~48		光禄大夫領尚書事、郡守 (二千)	36、88
韋玄成	元帝	驚(成帝) 3歳	前48~43	少府 (中二千)	御史大夫(中二千)→丞相(万)	73
嚴彭祖	〃	〃		左馮翊 (二千)	太子太傅として致仕	88
匡衡*	〃	〃	前42~38	光禄大夫 (比二千)	光禄勳、御史大夫→丞相(万)	81、82
林尊	〃	〃		少府 (中二千)		88
張譚*	〃	〃	前37~34?	京兆尹 (二千)	御史大夫 (中二千) → 丞相 (万)	76、79、93
趙玄	成帝	定陶王欣(哀帝) 17歳	前8	光禄勳 (中二千)	光禄大夫、衛尉、少府、 御史大夫	公卿表、11、86、88、97
閻崇*	〃	〃	前8		光禄大夫→執金吾 (中二千)	〃
師丹	〃	〃	前8	光禄勳 (中二千)	左將軍、大司馬、大司空 (万)	85、81、86

【表1】前漢の太子太傅と少傅*

【表2】前漢丞相の前職

皇帝	丞相	丞相前職
高祖	蕭何	県丞
高祖/恵帝	×曹参(相国)	斉国相
高后	×曹参(相国)	将軍
	×陳平 (左)	郎中令
	×審食其 (左)	典客
文帝	周勃 (右)	大尉
	漢嬰	大尉
	張蒼	王国相、御史大夫
文帝/景帝	申屠嘉	郡太守、御史大夫
	陶青	? 、御史大夫
	周亜夫	大尉
	劉舎	太僕、御史大夫
景帝/武帝	衛綰	太子太傅、御史大夫
	竇嬰	太子太傅
	許昌	太常
	田蚡	中尉
	薛澤	?
	公孫弘	左内史、御史大夫
	李蔡	王国相、御史大夫
	嚴青翟	太子太傅
	趙周	太子太傅
	石慶	太子太傅、御史大夫
	公孫賀	左将軍
	劉屈氂	涿郡太守
武帝/昭帝	×田千秋	大鴻臚
	×王訢	右扶風、御史大夫
	×楊敞	大司農、御史大夫
昭帝/宣帝	×蔡義	少府、御史大夫
	×韋賢	長信少府
	魏相	大司農、御史大夫
	丙吉	太子太傅、御史大夫
	黄覇	太子太傅、御史大夫
宣帝/元帝	于定国	廷尉、御史大夫
	韋玄成	太子太傅、御史大夫
元帝/成帝	匡衡	太子少傅、光禄勳、御史大夫
	×王商	右将軍
	×張禹	光禄大夫
	×薛宣	少府、御史大夫
	×翟方進	執金吾
成帝/哀帝	×孔光	左将軍
	×朱博	大司空
	×平当	騎都尉、御史大夫
	×王嘉	郡太守、御史大夫
哀帝/平帝	×孔光	光禄大夫、御史大夫
	×馬宮	光禄勳
	×平晏	長樂少府

注..

太子太傅・少傅経験者

Mentors of the Heir Princes in the Western Han Dynasty

SAITOH Sachiko

abstract

During the Western Han Dynasty, whenever a prince was officially recognized as the heir to the throne, two mentors would be appointed; *Taizi taifu*, the Grand Mentor of the Heir Apparent, and *Taizi shaofu*, the Junior Mentor of the Heir Apparent. The staff hired to handle the affairs of the heir apparent was under the control of the mentors, whose main role was to direct the heir princes in the correct and sound way. Usually, several mentors were appointed in succession for one heir apparent until his succession to the throne. A mentor's tenure was an average of five years, and the longest was eight years.

There are several noteworthy points. First, the types of mentors in the former and latter halves of the Western Han Dynasty differed greatly. The father emperors in the former half including Emperors Wen, Jing, and Wu, placed greater importance on aspects of a mentor's personality such as rusticity, seriousness, and generosity than their erudite background. However, after the reign of Emperor Xuan, authorities on Confucianism were mentors who personally gave lectures to the heir princes. Second, almost half of the mentors held top political posts, such as prime minister, in their later careers.

Keywords : mentors, heir apparent, the Western Han Dynasty, education of princes, Emperor Xuan